

後期シェリングにおける人格の論理（その１）

橋本 崇

The Logic of Personality in the later philosophy of Schelling(1)

Hashimoto Takashi

Abstract

“Only personality can heal what is personal.” is a key sentence of Schelling’s “Of Human Freedom”.

It means that a personal God can heal personal sufferings by his infinite, groundless love, because personality is deeply rooted in “nature in God”.

According to Schelling’s logic of personality, personality consists of two principles. One of them is dark principle, which is irrational basis of reality, and leads to evil. The other is light principle, which leads to reason. The conflicts between the two principles constitutes history, in which God reveals himself, and his infinite, groundless love.

１．『人間的自由の本質』における「人格的なもの」

「人格的なもののみが人格的なものをいやすことが出来る。」¹⁾

これは、シェリングの代表的著作とされる『人間的自由の本質』（以下『自由論』と略）のキーセンテンスであるが、一体いかなる意味であろうか。

一般的に考えれば、「いやす」という行為は、いやされる側の苦しみや痛みが分かち合えてこそ成されうるといふごくあたりまえのことと考えられなくもない。

しかし、キリスト教において「人格 (Person)」という概念が三位一体の中核をしめる概念であり、「人格」という概念こそキリスト教信仰の鍵であると言っても過言ではない背景を考慮すれば、このセンテンスには、我々キリスト教文化圏の外にある人間にとっては想像を絶するような、深い意味合いが含まれていると考えることが出来る。

『自由論』の終わりに近い箇所でシェリングは、「この論文において人格性について最初の明確な概念を打ち立てた」²⁾と語る。キリスト教の成立以来、様々な折に触れて繰り返されてき

た「人格」をめぐる議論に「最初の明確な概念」を与え、議論の道筋を整えたと自負するのであり、シェリング自身が『自由論』においていかに「人格」の概念を重要と考えていたかも理解されよう。

それでは、シェリングの誇る「人格」とはいかなるものであるか。「あらゆる実存は現実的な実存、すなわち人格的な実存となるためにある制約を要する。神の実存といえども、そのような制約なくしては人格的たり得ないであろう。ただ神はこの制約を自己の外にではなく、自己のうちに持つのである。」³⁾とシェリングはいう。あらゆるものが現実にも人格として存在するためには、時間的にも空間的にも制約を受けねばならない。なぜなら人格は時間的にも空間的にも制約された肉体を持って初めて、現実にも存在する姿を取り得るからである。神の場合といえども、無制約者であり続ける神は自身の姿を啓示することは出来ない。父なる神が子なるイエス・キリストに受肉したように、肉体の制約を受けてこそ、神は自身の姿を歴史の内に啓示することが出来たのである。人間の場合ならば肉体は神から与えられたもの、すなわち「自己の外に持つもの」である。しかし、神の場合は「自己の外に」何者も持つことは出来ない。なぜなら、神は唯一全能でなければならず、何かを「自己の外に」持つことは、神の全能を損なうことになるからである。

そして、この神が「自己の内に」持つ制約こそ、「神の実存の根拠、神の内なる自然」⁴⁾である。「神は、神の内なる観念的原理と（観念的原理に比べれば）独立な実存の根底が結びつけられることにより、最高の人格性となる。」⁵⁾とシェリングはするが、人格としての人間が肉体という自然的要素を根底に持たねばならないように、神も又「自己の内に」自然的要素としての「神の内なる自然」を持たねばならない。「神の内なる自然」は「神の実存の根拠」として、父なる神が子なるイエス・キリストに受肉する基盤、いわば観念的原理である形相に対する質料である。あらゆる現実的な事物が、質料と形相の結合によって成立するように、人格神も又観念的原理と「神の内なる自然」の結合により成立する。「神の内なる自然」なくしては、神も又自身の姿を歴史の内に啓示することは出来ないのである。

2. 『自由論』における人間の「人格性」

ここまで『自由論』における「人格的なもの」を神の「人格性」を中心に考察してきたわけだが、冒頭に掲げた「人格的なもののみが人格的なものを癒すことが出来る」というキーセンテンスを分析してみれば、癒す側の「人格的なもの」が神の「人格」を指すのに対して、癒される側の「人格的なもの」は人間の「人格」を指す。従って、このキーセンテンスを理解するためには、神の「人格性」のみならず、人間の「人格性」も考察していくことが必要であり、その上で両者の関係を考えねばならないことは明らかであろう。二つの「人格性」の説明のために、シェリングは神による世界創造を自然の根底にまでさかのぼったところから語り始める。やがてその世界創造のドラマは「人格的なものが人格的なものを癒す」救済の終幕にまで至るのである。

まず、世界創造のドラマは自然生成の原理の探究から始まる。シェリングは若き日から自然

哲学の研究に従事し、フィヒテの主観的観念論に対し客観的観念論を構築したとされるが、「我々の時代の自然哲学こそが諸学の中で初めて、実存する限りの存在するものと、単に実存の根拠である限りの存在するものの区別を打ち立てた。」⁶⁾と自負する。従って、神も又神として現実に存在するためには、神の内に実存の根拠を別に持たねばならず、この根拠が先に述べた「神の内なる自然」である。繰り返しになるが、神が自身の姿を歴史の内に啓示するためには、制約を伴う有限なものが無限な絶対者から産み出されねばならず、神自身の内に神の絶対者としての無限性を損なわない形で制約が存在しなければならない。その制約こそが「神の内なる自然」なのである。従って、自然の万物はこの「神の内なる自然」において生成する。無限な絶対者である神は神自身において自身を生成させることは決して許されず、「神の内なる自然」においてのみ有限である自然の万物は生成を許されるのであり、その終局が自身の似姿である人間の生成なのである。シェリングによれば、この「神の内なる自然」と神自身の関係は、「自然における重力と光の関係によりアナログカルに解明されうる。」すなわち、重力は闇の原理として「それ自体としては現勢的には存在しないものの、光の永遠に暗い根底として光に先行し、光が昇れば夜の内に逃れ去る。」⁷⁾というのであるが、光が光としてその真価を発揮するためには、その根底に闇が存在せねばならず、神自身が自身を光として啓示するためには闇を前提にせねばならない。

そして、この闇の原理としての「神の内なる自然」を、「人間により身近なものにしようすれば、それは永遠なる一者が自分自身を産み出そうとして感じる憧憬（Sehnsucht）である」。赤ん坊が自身の姿を知るためにどんな形であれ自身を鏡に映しだしてみたいと感ずるように、世界創造以前に神も又自身の姿を知るために何かを産み出してみたいという憧憬を感じる。「神の内なる自然」とはこの神が何かを産み出そうとする「憧憬」なのであり、その「憧憬」は未だ中心の定まらないカオスにすぎず暗黒のみが支配する闇の世界である。「憧憬は神を、すなわち底知れぬ統一を産もうと欲するが、そう欲する限り憧憬の内に未だ統一はない。従って、憧憬はそれ自体としてみれば意志であるが、何ら悟性を含まない意志であり、それ故自立した完全な意志ではない。」⁸⁾この「憧憬」は、神自身を産み出そうと欲するものの、絶対に神自身に到達することは出来ない。なぜなら、神自身が神自身を産み出してしまえば、神自身とは独立であったはずの根拠は神自身の「底知れぬ統一」の内に飲み込まれてしまい、何も産み出さなかったのと同じ原点へと戻ってしまうからである。

そして、「この憧憬に対応して、神自身の内に一つの内的な反射による表象が生まれる。」この「反射による表象」こそ「神の写像」であり、全自然がこの「神の写像」として産み出され、人間の人格において完成に至る。さらに、「この表象は同時に悟性（Verstand）であり、——かの憧憬の言葉である。」⁹⁾この箇所を理解するためには、西谷啓治氏の指摘¹⁰⁾通り、ヨハネによる福音書の冒頭部、「初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。初めに神とともにあった。万物は言葉によってなった。なったもので言葉によらずなったものは何一つなかった。言葉の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」を考慮に入れる必要がある。初めに神とともにあった言葉が、神自身の像でありつつ神とは異なるものとして発せられるとき、万物の創造が始ま

る。自然の万物は言葉によってなり、言葉の中の命とされる光によって生かされている。

従って、先に引用した「重力と光の関係」による「アナログカルな解明」とは、重力や「憧憬」である「神の内なる自然」の闇に、「神の写像」としての言葉や悟性が光となって照らしだされる、世界創造の最初の場面を指していると考えなければならない。シェリングはここで悟性を言葉に並べて用いているのであるが、悟性とは一体どのようなものであろうか。悟性とも理性同様に非常に理解の難しい概念であるが、シェリングはこの悟性を「意志の内なる意志」「自立した完全な意志」¹¹⁾とし、「分かたれた根底の内に隠された統一すなわちアイデアをを露呈せしめる、」あるいは、「あたかも種子のように無意識の内にはあるが、必然的に自然の中に含まれていた統一を、諸力を分離させることにより展開する」¹²⁾という。すなわち、「憧憬」がいつまでも中心の定まらないカオスの状態で神自身の「底知れぬ統一」の内に飲み込まれ続けるのに対し（このことから自然哲学において重力が闇の原理とされることも理解されよう。）、悟性は「神の写像」の中心をしっかりと見定め、その中心から自然の持つ様々な力を展開させていくのであり、神自身とは独立な実存の根底である「神の内なる自然」にしっかりと根付いている。従って、悟性は自身の有限性を自覚することにより神自身に飲み込まれることのない「自立した完全な意志」であり、漠然とした意志にすぎない「憧憬」の中で「意志の内なる意志」とされる。

こうして悟性が「憧憬」の中に自然の持つ様々な力を徐々に展開させていく段階に応じて、自然の万物が生成する。分離された力は後に様々な生物が生成していく際に「肉体が形成される素材」となり、「この分離の内に、自然の根底の深みから諸力の中心点として成立する生きた紐帯」は「靈魂 (Seele)」¹³⁾である。自然の持つ様々な力が徐々に分かれ展開されていくにつれて、微生物、植物、動物・・・というように肉体も複雑化し、靈魂もより複雑な構造を結びつけるものとなる。しかし、どのように力が展開していこうともその根底には悟性と「憧憬」の対立が存在し続けるように見える。「憧憬」は、悟性による「神の写像」の統一に抵抗し、「神の内なる自然」の無秩序にとどまり続けようとする限り「被造物の我意 (Eigenwille)」であり、「欲望」や「盲目なる意志」であり続ける。それに対して悟性は、「普遍意志 (Universalwille)」¹⁴⁾として、被造物の我意に抵抗し自身の内に神の像を結ぼうと努力し続けるのであり、我意と普遍意志の対立はどこまでも続き、調停不可能と考えられなくもない。

しかし、全自然の生成の完成であり、「神の似姿」である人間においては事態が異なってくる。なぜなら、人間において自然の持つあらゆる力は展開し尽くし、悟性が露呈せしめる「神の写像」の統一とその中心は、低い段階の植物や動物のように偏ることなく「神の内なる自然」全体の統一、中心と一致するからである。このことは、自然の生成の完成である人間にいたって初めて、「憧憬」と「悟性」、あるいは「被造物における我意」と「普遍意志」が対立せず、完全に一致しうる可能性を与えられたことを意味している。「同じ人間の内には暗い原理のあらゆる力が存在すると同時に、光のあらゆる力が存在する。人間の内にはもっとも深い深淵と最も高い天が、そして両者の中心があるのである……人間においてのみ神は世界を愛した。そしてまさにこの神の似像が、憧憬が光と対立するようになったときに、憧憬をその中心においてとらえたのである。」¹⁵⁾

このように、被造物の内人間において初めて我意と普遍的意志が一致しうる可能性が与えられたわけだが、このことは人間にほかの被造物にはないものが生成したということであり、それが「精神 (Geist)」である。「靈魂が両原理の生きた同一性であるとき、それは精神である。」すなわち、自然の諸力の紐帯である靈魂は自然の万物のそれぞれに存在するが、人間以外の被造物では悟性が「神の内なる自然」の全体を中心を見いだすことが出来ぬために低次の段階にとどまる。しかし、人間において初めて、悟性の見いだす中心と憧憬がとどまろうとする中心が一致する可能性が与えられ、悟性と憧憬の同一性である「精神」が誕生するのである。

「そして精神は神の内にある。今もし人間の精神の内両原理の同一性が、神におけるのと同じようにほどけがたいものであったならば、何の差別もなく、神は精神として啓示されなかったであろう。従って、神においては裂けがたい統一が人間においては裂かれうるものでなくてはならない。——そして、これが善と悪の可能性である。」¹⁶⁾とシュリングは続ける。人間が神の似姿として「神の内なる自然」における完全な写像である限り、人間の精神は神の精神を映したものであることになる。しかし、神自身の精神と「神の写像」としての人間の精神の間には大きな差異があり、それは人間の精神においては悟性と憧憬の統一が「裂きうる」ということである。人間の精神は神の精神とは異なり、「神の内なる自然」という神とは独立の根底から昇ってきたものであるから、常に悟性と憧憬の対立を根底に持っている。従って、いつでも人間の精神は動物の靈魂へと墮落し、悟性と憧憬を同一性から対立へと差し戻してしまう可能性を持つのである。それに対して、神の精神はそのような対立とは全く無縁であり、可能性と現実性の区別とも無縁であるから、悟性と憧憬の同一性は裂けがたいのである。

さらに、シュリングはこの両原理の裂ける可能性を「善と悪の可能性」とするが、このことは悟性と憧憬の対立が「普遍的意志」と「我意」の対立であったことを思い起こせば、理解されるであろう。精神が自身の中心をしっかりと見据え、「我意」が「普遍的意志」に一致するように行為するならば、そこには「普遍的意志」のみが支配する善が産まれるわけだが、逆に精神が自身の中心を見失い、「我意」が「普遍的意志」からそれてしまうならば、そこには「我意」が支配する悪が産まれる。シュリングは前者の状態の精神を「愛の精神」、後者の状態の精神を「悪の精神」あるいは「二分の精神」と言い換え、歴史を二つの精神の格闘によるドラマと捉える。「光の誕生は自然の国であるように、精神の誕生は歴史の国」であり、「悪とは実存に対する元底 (Urgrund) に他ならず、元底は被造物の内現勢化しようとしているのであり、従って実際には自然の内に働いている根底のより高次のポテンツ (勢位 Potenz) にすぎない。」¹⁷⁾すなわち、「憧憬」という闇の原理と「悟性」という光の原理の対立から「自然の国」が築かれていったのと同様に、「愛の精神」と「二分の精神」の対立から「歴史の国」が築かれる。「歴史の国」において「二分の精神」は「我意」を「普遍的意志」から分けてしまうのであるから、いわば「第2の闇の原理」¹⁸⁾の働きを為すのであり、自然における闇の原理が「ポテンツ」を高めたにすぎないものと考えられるのである。

このように悟性と憧憬、あるいは「普遍的意志」と「我意」とが一致するところに精神が誕生するわけだが、シュリングはこのような精神における両原理の結合を「人格性 (Persönlichkeit)」と名付ける。「我性は精神であることによって、同時に被造物的なものから

超被造物的なものへと揚げられる。我性は、自身を完全な自由の内に見いだすような意志であり、もはや自然の内に創造しつつある普遍的意志の道具ではなく、あらゆる自然を超えて、その外にある意志である。自然の内で光と暗い原理の統一を超えていったように、精神は光を超えている。こうして、我性は精神であることにより、両原理から自由である。」¹⁹⁾とシェリングは続ける。ここで「我性」は「我意」と同じように使われているが、「我意」が「普遍的意志」に結びつき「人格」となった「精神」は、両者の対立や統一を超えて「超被造物」の座へと登り詰める。なぜなら、「人格」は自由を持つからであり、自らの自由意志によって、「我意」と「普遍的意志」の対立に引き裂かれた獣性へと身を落とすことも出来れば、そのような対立を超えて自由に普遍的意志のままに生きることも出来るのである。「人間の頽廃が獣になるくらいですむならば、願わしいことであろう。しかし残念ながら、人間は獣の下か上に位置するのみである。」²⁰⁾とシェリングはバーダーを引用しつついうが、人格としての精神は自由を持つが故に、獣において自然の内に与えられた靈魂の紐帯でさえほどいてしまうことが出来る。このことは、人間が獣以下の動物に成り下がることを意味するが、一方ではその自由故にあらゆる被造物が苦しまなければならぬ対立を完全に超越することが出来る。従って、人間は「人格」となり自由を持つことによって、すべてを神によって創造されるという「被造物的なもの」を超えて、自らの意志により自然の中に自分を位置づけるという「超被造物的なもの」へと昇っていくのである。

3. 『自由論』における神の「無底」

以上、『自由論』において人間の人格性が、「闇の原理」である「憧憬」あるいは「我意」と、「光の原理」である「悟性」あるいは「普遍的意志」の結合の上に成立することをみてきたわけであるが、それでは人間の人格性と神の人格性の関係はどのようになっているのであろうか。それを考えていくためには、シェリングの描く世界創造のドラマをさらに視野を広げてみていく必要がある。

まず、前章で述べたように、神は世界創造に先立って、自身の内に「神の内なる自然」を持ち、そこからあらゆる有限な被造物を産み出したわけであるが、「あらゆる根底の以前に、そしてあらゆる実存するもの以前に、従って総じてあらゆる二元性の以前に、一つの存在するものがなければならない。これは元底 (Urgrund) あるいはむしろ無底 (Ungrund) と呼ばれる以外になんと呼ばれ得よう。それはあらゆる対立に先行するものであるから、それらの対立はその内では区別され得ず、又何らの仕方でも存在していることも出来ない。従って、それは両者の同一性として言い表すことは出来ず、ただ絶対的無差別 (absolute Indifferenz) としてのみ言い表され得る。」²¹⁾とシェリングはいう。すなわち、神は実存する以前に、あらゆる対立や二元性を越えた「元底」あるいは「無底」として存在したというのである。この「無底」としての神の内ではいかなる対立も差別も存在し得ないのであるから、実存するものと実存の根底の区別もなく、何一つ存在し得ない。それはすべての対立と差別を飲み込んでしまうものではあるが、すべてを包み込む絶対無差別の底知れぬ愛でもある。「愛こそ最高のものである。愛こ

そ根底が、そして実存するものが（分かれたものとして）存在した以前に、現存したものである。」²²⁾

そして、「無底が二つの同様に永遠なる始源に分かれるのは、ひとえにそれが無底である限り無底の内で同時に存在することも一であることも出来なかった二つのものが、愛によって一つになるためであり、生き愛すること、人格的な実存があるためである。」²³⁾ すなわち、神が原初の「無底」のままあり続けるならば世界も何も存在しないのであるが、わざわざ神が「無底」から実存するものと実存の根底へと自身を分かち、世界や自然の万物を創造しはじめたのは、ほかならぬ自身の底知れぬ愛を、従って自身の原初の姿を啓示するためだったのである。その世界創造のドラマの中で、実存するものと実存の根底が分かたれ、その両者の間に愛が産まれる。この愛は自然の万物の生において啓示されるものではあるが、悟性を中心を見いだせず憧憬と対立し続ける限り、十全な形においては成就し得ない。しかし、創造の完成であり「神の似姿」である人間の人格において初めて、「神の内なる自然」の中心が明らかになり、両者の愛が完全に成就する可能性を与えられるのである。

従って、「最高の人格性」²⁴⁾とされる神は、「神の内なる自然」という実存の根底を自身の内に持つが故に人格とされることは先に述べた通りであるが、人格である以前に底知れぬ愛である「無底」であったからこそ、すべての被造物を自身の無限の愛で包み込むことが出来る。そして、その愛は人間の人格という創造の完成において最も十全な形で成就しうる。従って、この「癒し」という両者の関係は、他ならぬこの「無底」としての神の底知れぬ愛に基づいている。神は「無底」として、「神の内なる自然」をも包み込む愛であるからこそ、「人格的なものを癒すことが出来る」のである。

4.『自由論』における「人格」の特徴

以上、シェリングの『自由論』における「人格的なもの」を素描してきたわけであるが、シェリングが「最初の明確な概念」を打ち立てたと自負する「人格」の特徴を以下のようにまとめることが出来る。

(1)「人格」は「神の内なる自然」の内に「実存の根底」を持つ。

「最高の人格性」としての神が、自身の内に実存の根底として「神の内なる自然」を持たなければならなかったように、人間の人格も又「神の内なる自然」に由来する「憧憬」に根ざしている。「あらゆる人格性は一つの暗い根底の上にに基づいている。」²⁵⁾とシェリングはいうが、この「一つの暗い根底」こそ、「神の内なる自然」であり、「人格的なものが人格的なものを癒す」ことが出来るのも、両者がこの同じ根底の上にに基づいているからに他ならない。

(2)「人格」は「神の内なる自然」に由来する闇の原理と悟性に由来する光の原理の対立により生成する。

このことは先に引用したヨハネ福音書冒頭の光と闇の対立の中からの言葉の生成と密接に結びついている。「人間において初めて、他のいかなる事物においてはまだ抑えられ不完全であった言葉が完全に発言される。」²⁶⁾あるいは、「悪との対立において世界に発言された言葉も、

人間性あるいは我性を執り、それ自体人格的とならなければならない。』²⁷⁾ とシェリングはいうが、人格としての人間の誕生は完全な言葉の誕生に他ならないのである。

(3) 「人格」を構成する闇の原理は悪の原理として、悪の存在論的問いに対して愛による救済という究極の答えを導く上で、非常に重要な役割を果たしている。

そもそも「実在的で生きた自由の概念とは、善と悪の能力であるということである。』²⁸⁾ とするシェリングは、「なぜ悪が存在するのか」という悪の存在論的問いを『自由論』の中心にいたわけであるが、「人格」を構成し「神の内なる自然」に由来する闇の原理は、普遍的意志に対する「我意」として「悪の精神」の根底を成している。そして、「悪の精神」をも含めた人格がやがて神の底知れぬ無限の愛に包まれ「いやされる」ことが、創造の究極の目的であり、悪の存在論的問いに対する答えである。

「これらのことすべてが言われた後にもなお、悪は終わるのか、いかにして終わるのかという問いはいつまでも残る。そもそも創造には何か究極の目的があるのか。もしあるとすれば、なぜ直接その目的に到達されないのか、なぜ完全なものが初めから存在しないのか。これらの問いに対しては、すでに与えられた以外の答えはない。すなわち、神は単に一つの存在であるのではなく、一つの生命であるから、という答えである。そして、あらゆる生命は一つの運命を持ち、苦悩と生成に服している。従って、神が人格的になるためにまず光と闇の世界を分けたそのとき、神は自発的に苦悩と生成に服したのである。存在は生成においてのみ自らを感覚し得るものとなる。存在の内にももちろん生成はない。存在の内で存在自体はむしろ再び永遠として定立される。しかし、対立を経た上での成就には必然的に一つの生成がある。古代のあらゆる密儀や精神的宗教に共通する、人間的に苦悩する神という概念なくしては、歴史全体は不可解なものにとどまる。』²⁹⁾

すなわち、悪の存在論的問いに対するシェリングの答えは、神が「苦悩と生成」に服する「生命」を持った存在であるということに帰着する。ヨハネ福音書の冒頭に「言葉の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」とあるように、「命」は光と闇の対立の中においてのみ輝くことが出来るのであって、光のみが存在するところでは「命」は「命」として感知し得ない。神は自身の「命」を啓示するために、歴史の中で自発的に「苦悩と生成」に服し、「人格的に」なったのである。

従って、「人格的なもののみが人格的なものをいやすことが出来る」という際に、「人格的なもの」が分かち合うことが出来る苦しみや痛みとは、この「苦悩と生成」に他ならないのである。人格的な神は「苦悩と生成」を背負うものとしてのみ、人格としての人間をいやしうるのである。

『自由論』以降の後期シェリング哲学は、『神話の哲学』と『啓示の哲学』を軸とする積極哲学として、この悪の存在論的問いを「なぜ一般に何かがあって、何もないのではないのか。」というライプニッツ以来の哲学の「究極の問い」³⁰⁾ に結びつけて展開していく。その展開の中で本文で述べた「人格の論理」がどのように展開されていくかについては更なる検討を要するが、これについては後論に譲りたい。

註

- 1) F.W.J.Schelling “Über das Wesen der menschlichen Freiheit und damit zusammenhängenden Gegenstände” Sämtliche Werke, hrsg.v.K.F.A.Schelling. Stuttgart 1856-61（以下SWと略記），VII 380
西谷啓治訳『人間的自由の本質』岩波文庫 1975を参照した。
- 2) SW VII 412
- 3) SW VII 399
- 4) SW VII 358
- 5) SW VII 395
- 6) SW VII 357
- 7) SW VII 358
- 8) SW VII 359
- 9) SW VII 360ff.
- 10) 西谷前掲書 註 p.173
- 11) SW VII 359
- 12) SW VII 362
- 13) SW VII 362
- 14) SW VII 363
- 15) SW VII 363
- 16) SW VII 364
- 17) SW VII 377ff.
- 18) SW VII 377
- 19) SW VII 364
- 20) SW VII 373
- 21) SW VII 406
- 22) SW VII 406
- 23) SW VII 408
- 24) SW VII 395
- 25) SW VII 413
- 26) SW VII 363ff.
- 27) SW VII 377
- 28) SW VII 352
- 29) SW VII 403
- 30) SW XIII 242